「平和大使として広島へ行って」

74年前に思いを馳せて

東深井小学校　6年　氏名秋谷 陽向

令和元年八月六日の広島は雨だった。「ザー」と流れる雨を見上げて七十四年前、原爆が落とされた後の広島には黒い雨が降っていたのだと思った。七十四年前へ思いはめぐり、そして今に戻ってくる。平和記念式典では広島市長の話しが始まった。「一人の力は小さくても、多くの人の力が結集すれば願いが実現する。」という話、その例としてガンジーの名も挙げられた。最近読んだガンジーの伝記を思い出し、正に例に挙げるにふさわしいと感じた。

初めての広島は衝撃的なことばかりだった。一日目に被爆体験伝承者の話を聞いて、「見る」だけではなく「聞き」原爆の悲惨さを感じた。焼け野原となった広島で家族を探しても見つからないと聞いて家族といつもいっしょの僕はたえられないと思った。七十四年前の僕と同じ普通の小学生だって同じ気持ちだと思った。一番驚いたのは平和記念資料館での人の影が映った石段だ。写真では見たことがあったが、本物を見ると「その人だって夢も希望もあってまだ生きたかっただろうな。」という感情が強く芽生えた。今までに何度も何度も写真で見ていた原爆ドームは、実物は写真で見ている時とは全く違う感情で胸が熱くなった。足元に広がるガレキの量がとても多くて、丈夫そうな建物が一瞬で崩れた様子を物語っていて忘れられないものとなった。

今までも広島に原爆が落とされたのは酷い事だと思っていたけれど広島を見て聞いてこんなことがあったのに世界にまだ核兵器があるのだと憎たらしく思った。

僕は平和大使として広島へ行き、学んだ。そして、世界が少しでも平和に近づけるように、見たり聞いたりしたことをありのままに沢山の人へ伝えたい。僕にとって、それが「大使」としての役目だと思う。

「平和大使として広島へ行って」

ぼくにできることを考える

小山　小学校　6年　氏名安宅　悠人

ぼくは、広島の平和祈念式に参加して、もう戦争を絶対に起こしてはいけないと強く思いました。

被爆伝承者六信さんの話を聞いて、被爆した竹岡さんが火傷で顔も分からなくなったお母さんを探し、その火傷を治療するのに麻酔のない状態だったこと、このようなつらい体験をこれ以上してほしくないとお母さんが願っていたこと、被爆して放射線を浴びて差別を受けた人がいたことなど、自分たちが何か悪いことをしたわけではないのに、戦争のために、たった三メートルくらいの大きさのひとつの原爆でこのような思いをする人がたくさんいたことが、すごくかわいそうでした。自分がその場所にいたら、家族がいなくなっていただろうと思うと、悲しいし怖くなりました。

資料館では、当時着ていた服や、ご飯がそのまま残ったお弁当箱と水筒があって、原爆が落ちたときは何もできないくらい、一しゅんのことだったのだということがわかりました。そんな中でも、必死に生きようとしていたことも感じられました。

資料館に入ってまず見える平和監視時計は、ぼくが行った時には百七十日くらいを表示していました。これは、世界で最後に核実験が行われた時から数えた日にちのことです。二度と使ってほしくない原爆ですが、いまだに核実験が行われていることに衝撃を受けました。

今回平和大使として、今まで行われていることも知らなかった平和祈念式に出席できたことは、貴重な体験でした。ぼくにできることは小さなことですが、平和に対するこの思いを忘れず、毎年八月六日の平和祈念式をテレビで見るようにして、原爆の被害や、平和監視時計のことを、周りの人に伝えて、時計がリセットされないよう見守っていこうと思います。

「平和大使として広島へ行って」

一番大切なこと

流山市立江戸川台小学校　六年　氏名飯塚 泉葉

昭和二十年、今から七十四年前の八月六日八時十五分。広島に、世界で初めて原子爆弾が投とされた。被爆者は語る。

「自分の周りの人達が、自分の人生が、どんどん変わっていった。」と。

一瞬にして、たくさんの尊い命が失われ、未来や希望が無差別にうばわれた。

被爆者は、身体はもちろんのこと、心にもより深い傷を負った。そしてそれは、今なお続いているのだ。

以前は、戦争は遠い国、遠い時代に行われていたものと考えていた。しかし平和大使として広島へ行き、日本でも、このような悲惨なことが起こったのだということを改めて思い知った。そして戦争、原爆を身近なものに感じた。

今の日本は戦争をしていない。たか、他の国では、冷たく、悲しい戦争が起きている。

そして、今、この瞬間も、何の罪もない平凡な人々の日常が、そして命がうばわれている。とんでもない話ではないだろうか。これは、自分達にも決して無関係ではないはずだ。

このまま戦争を続ければ、また広島のような悲劇が起こるかもしれない。また、あの地こくのような光景がよみ返るかもしれない。

広島では、戦争を終わらせるために、原爆が投とされたのだから。

自分達は、平和とは何かを学ぶために広島へ行った。戦争で、幸せな物は何一つ生まれない。悲しみや、憎しみが生まれ、多くの命がうばわれるだけなのだ。あの悲劇をおこさないようにすることが、自分達の役目ではないだろうか。

広島へ行き、平和が尊く感じられた。これから、世界中の人々が平和に暮らしていくために、この経験を大切にし、次につなげていきたいと思った。世界中の一人一人が、互いを尊重し、認め合い、なぐさめ合い、助け合うこと。それが一番大切なことだ。

「平和大使として広島へ行って」

広島で学んだこと

おおたかの森　小学校　五年　氏名 市村 颯太

「ドーン！ピカピカッ」

ぼくが被爆体験伝しょう者の六信さんから聞いた一番印象に残った言葉です。ぼくは、八月五日から六日に広島へ行きました。広島で七十四年前にどのようなことがあったのかこの眼で見るためです。

六信さんの話していたことは、想像を絶する内容でした。原爆の落ちた音は、ぼくの心にっさっさりました。原爆が落ちた後の川には、多くの人がたおれ、その人達の血で川の水は真っ赤に染められていたそうです。その光景が、ぼくには目にうかびませんでした。しかし資料館でそれを見た時、全身に鳥肌が立ちあまりの悲さんさに言葉を失ってしまいました。また黒こげになった人々の山、人の骨が積み重なった写真などは、今の平和な生活からは想像もつきません。

平和はどうしたら続けられるか考えました。市長の言葉で、「平和は決して当たり前のものではありません。たくさんの知恵と努力によって守られ創られています。」と聞き、ぼくは思いました。今、食べ物を食べている時、その食べ物を作ってくれる人。また、ゲームをやっている時、そのゲームを開発してくれている人。病気になった時、助けてくれる人。そういう人には、ありがとうと思います。でもこれだけではありません。仕事をしている人、そして日本で生活をしている人全員が平和を願い、守っていると信じています。この平和を続けるために、ぼくの出来ることは、広島で起こったことを受けとめこのことを、家族や友達など多くの人に伝えることです。そして忘れないことです。広島の平和大使として、自分の人生に大切なことが学べたと思います。

「平和大使として広島へ行って」

広島で見聞きした悲惨な過去

長崎 小学校　6年　氏名 大村 響

広島で見聞きした悲惨な過去

大村 響

私の毎日は、好きなときにねて、好きなときに食べて、好きな所へ行き、好きな勉強ができる。それがあたり主えだと思っていた。しかしそれは、あたりまえではない、間違った考えだと感じた。

七四年前の八月六日。世界ではじめて原子爆弾が落とされた日。その日について深く知るために、私は平和大使として広島に行った。

被爆体験伝承者、六信静枝さんから被爆体験者、竹岡智佐子さんについてさまざまなことを教えてくださった。

竹岡さんは当時十七才。「人間魚雷」をつくる工場で働いていた。その日の前日は早帰りで家にいた。その時だった。ピカッ！ドカン!!という音とともに目がくらんだ。気がつくと、そこは家から三十メートルほどはなれた畑の中だった。ふと空をみると雲がけむりかわからない、大きなキノコ形のもくもくが、たちのぼっていた。町の様子をみに行くと、割れた地面の中から、焼けこげた人々がみえた。水がみえないほど死体でうめつくされた川もみえた。広島市内は、焼け野原だった。

そんな光景を実際に見た人々はどう思ったのだろう。大好きな広島の街が焼けていくのをみて、どう感じただろう。今でもずっと忘れられずに心に傷を負い続けているだろう。

原爆資料館では悲惨な状況が写真や絵としてありありと伝わってきた。見ているこっちまで悲しい気持ちになった。原爆死してしまった人の遺品がある場所に、たった二才で亡くなってしまった子の遺品もあった。

今も原爆症で苦しんでいる人がいる。原爆でなくなった昔の広島、広島市民たちの命、それらを忘れてはいけない。忘れずに私たちのような戦争を知らない人に伝えていかなくてはいけない。そしていつか、戦争のない未来を作るのが私たちの使命だと、私は思う。

「平和大使として広島へ行って」

広島原爆

おおたかの森小学校　6年　氏名　小上真那

74年前の8月6日。広島に原爆が投下されました。それは、私の想像をはるかに越えた残酷なものでした。原爆は、罪のない人の命を奪い、家族も奪い、幼ない命までも奪いました。私は、平和大使として広島に行き、原爆がもたらした辛い過去を、被爆体験伝承者の方からお話を聞き、広島平和記念資料館で74年前の現状を見て来ました。被爆体験伝承者の方のお話しで一番心に残った内容は、全身焼けてしまった広島の人達が

「暑い。暑いよー。」

と言いながら川へ向かい、その川で息絶てしまった事です。川は水が見えないぐらいたくさんの死体がういていた事を聞き、私は原爆の悲惨な映像を見ていませんが、頭の中ではきりと想像したくない物を想像してしまいました。そして広島平和記念資料館では、私よりも小さい子供が真っ黒に焼けて、ぐったりしている写真や、放射線で病気にかかり、今にも

「助けて」

と呼びかけてきそうな、写真。のどがかわいて黒い雨を飲んでいる絵などが飾られてありました。私は、広島へ行き、原爆とは

「人を苦しませ、残された家族の心を傷つける凶器」

だと。私は、広島原爆をあまり真剣に考えた事はありませんでした。ですが、平和大使として広島に行き、被爆体験伝承者の方のお話しや、広島平和記念資料館に行った事で、原爆被爆者の辛い思いに少しでも近づけたと感じます。

「平和大使として広島へ行って」

平和の大切さを知って

流山北小学校 五年 氏名 片山琴音

ぼくは、原ばくや戦争について学ぶために広島に行きました。原ばくが、どのようにばく発するのかを知った時、それまで思っていたのと全くちがっていました。原ばくがどういうものなのかを、その時初めて知る事が出来ました。原ばくは、放しゃ能などを多くの人々に浴びさせて死なせてしまうあぶない兵器だと知りました。これは、二度と使ってはいけないものだと思い出しました。

原ばく体験の伝しょう者から、七十四年前の八月六日に起きた事を聞く事が出来ました。戦争というものが、どれだけあぶなく、おそろしいという事がわかりました。広士以外の一ぱん市民がひ害者となっている戦争は、絶対に起こしてはいけないと感じました。世界中の国が、平和になるためには、国同士で話し合いをし、行動していく事で戦争のない世界になるのではないかと思いました。

そして、未来の日本を作っていくぼくたちは、世界中の人達と仲良くなって、平和で安心できる社会にしていく必要があります。そのために、ぼくは、外国語を学びこまっている外国の人達を助けてあげたいと思いました。そしてこれから、世界中の人達に戦争のおそろしさを伝えるために、外国人との活動の機会を持ちたいです。

最後に、平和大使として広島に行った事で、ぼくの戦争に対する考えが変わりました。広島に行く前は、平和大使の意味も原ばくのおそろしさもよく分かりませんでした。しかし、原ばくの伝しょう者から聞いた原ばくのこわさや怖さを学び、戦争を知らない世代の人達に伝える活動をぼく達も広めていく必要があると感じました。今回の経験で学んだ事を活かし、平和の重大さや大切さをみんなに知らせて行こうと思います。

「平和大使として広島へ行って」

平和　～どんな時も　だれにとっても当たり前に～

流山　小学校　6年　氏名　亀山　知啓

毎日学校に行き、家に帰ればおやつがある。それは、僕にとっての「平和」であり、ごく当たり前のことだ。しかし、七四年前には僕の当たり前は当たり前ではなかった。

語り部の方のお話を聞いて、原爆の恐ろしさを痛感した。爆風で家から三十メートルも吹き飛ばされ、歩くのも辛いほどの傷を負った。しかし、それがほんのかすり傷に思えてしまうくらい、ひどいけがを負った人がいたという。全身黒焦げで、皮膚がはがれて垂れ下がり、目も飛び出ているような、男女の区別もつかないような人が、川の水面を埋め尽くしていたそうだ。どんなに痛かっただろうか。どんなに苦しかっただろうか。僕には想像すらできない。

広島に落とされた原爆は、たった三メートルの爆弾だが、その威力はすさまじい。一瞬にして亡くなった方、全身に大やけどを負い、苦しみながら亡くなった方、麻酔のないところで何度も手術を受け、生き地獄とも言えるほどの苦しみを経験した方、放射線によって原爆症になった方、「ピカの毒がうつる」と差別を受けた方、生き残ったことに後ろめたさを感じ続けた方など、多くの方を長い間苦しめ続ける恐ろしい兵器だ。僕は科学が好きだ。しかし、科学や技術革新は、人々を幸せにするために使われるべきだ。目先の利益にとらわれ、失われる平和、命の尊さを忘れてはならない。だからこそ、戦争を生き抜いた人、被爆者の声を聴き、目を背けず、戦争の悲惨さを後世に伝えていくことが大切だと思った。

「戦争」と「平和」は相対するものであると思う。戦争は、人を人として扱わない。相手を尊重しない。命を大切にしない。平和はその逆である。それならば、平和を作り出すことはさほど難しくないはずだ。多様性を認め、相手を尊重すればよいのだ。僕は二度と戦争によって悲しむ人、苦しむ人が出ないように、平和大使として広島で学び、感じたことを、一人でも多くの人に伝えていきたい。

「平和大使として広島へ行って」

平和の大切さ

長崎　小学校　5年　氏名金子成弘

平和大使として広島へ行って、平和の大切さを学んできました。ぼくは戦争は絶対いけないと思いました。なぜなら戦争は、関係ない人の命まで、うばってしまうからです。だから戦争は、絶対にやってはいけないと思いました。

広島について一番最初に、平和記念公園に鶴のけんのうをしに行きました。鶴はとうめいなケースにいれられて、外から見えるようになっていました。ぼくはたくさんの鶴を見て世界中の人から贈られてきたのだなと思いました。

ぼくはその後、広島平和記念資料館に行きました。そこでは遺体の写真や骨の写真などがあり、ぼくは途中で具合が悪くなりました。原爆資料館にいると、なぜだか不安になるような気がました。どうして日本は戦争を初めたのか知りたいです。

2日目にぼくは、平和祈念式典に参加しました。平和祈念式典では、いろいろな人が来ていました。平和記式典は音楽で始まりました。

ぼくが思い出に残っている話は、市長が話した「原爆で焼けこげて男女の区別ができなくなった人の話です。ぼくはその話を聞いた時に、戦争は絶対にいけないと思いました。

ぼくは平和が大切だと思いました。ぼくは戦争のない世界を目指して、被ばく者からもらった平和のたねを伝えていきたいと思いました。

ぼくは二度と戦争のない世界を目指してがんばっていきます。ぼくは戦争のひさんさやあやまちを今後の世界の人たちに伝えていきます。例えば、友だちがけんかしているときに平和は大切だよと言ってみます。あとは弟たちに伝えてみようかなと思います。ぼくは平和大使としてがんばっていきたいと思います。

「平和大使として広島へ行って」

平和についてぼくが感じたこと

流山　小学校　5年　氏名工藤泰人

ぼくは、平和大使として八月五・六日に広島に、行きました。

被爆体験伝承者の方の話では、原爆で家がくずれがテスやくぎが体やわきにささった話を聞き、くやしくて悲しくてつらかったんだろうととても感じました。他にも三十五万人いた広島の人が十四万人まで減少し、しかもその十四万人も原爆病になった話を聞いて、とてもこわかったんだろうなと感じました。

原爆資料館では、ボロボロに焼きこげた服やズボンやまっ黒になった三輪車やかげが焼きついた階だん、そしてぼくの中で一番心に焼きついたのは、八時十五分で止まった時計です。ぼくは、その時計を見て色々と考えました。たとえばこのまま広島の人たちはふつうなら八時十六分をむかえるはずだったのに原爆が投下されたことで、たくさんの命がうばわれたことが、この時計を見て感じることができました。

平和祈念式の中で特に印象に残ったのは、もくとうです。被爆者は、八時十六分をむかえたくてもむかえられない人がそのすごくたくさんいることを忘れてはいけない人だなと心の中でとても感じました。平和宣言を聞いた時、今は平和な国でよかったと改めて感じることができました。

ぼくは、平和大使として広島に行ってもよかったと感じることができました。きち人と昭和二十年千九百四十五年八月六日午前八時十五分何があったのかを改めて知ることができたのと、平和というものは、とてもすてきなことだということに気がつくよいきっかけになりました。

なにより広島に行って一番感じ、じっかんしたのは、もう二度と、戦争はしてはいけないことだしもう二度と、きのこ雲を見ることがないようにするのが平和大使のやくめだとぼくは、広島に行ってとても強く感じることができました。

「平和大使として広島へ行って」

広島へ行って感じた事

流山 小学校　6年　氏名 久留井結

今回平和大使として、初めて広島へ行きました。初めは私には平和大使は無理だと思い、参加したくありませんでした。けれども、実際行ってみて、原爆ドームや平和記念資料館でたくさんの戦争の写真を見たら、戦争の悲惨さがひしひしと伝わってきました。また、実際に被爆した方の話を聞いたらあまりに悲しくて泣いてしまいました。原爆で多くの人が亡くなったと聞き、人が亡くなった事はもちろん悲しいけれど、残された家族はもっと悲しい思いをした事でしょう。今でも原爆を体験された方が、こうして何も知らない私達に教えてくれた事は、将来に語りつないでいかないといけないなと感じました。私は思いました。原爆はいっしゅんにして多くの人の命をうばったのだと。今でも世界のあちこちで戦争がおきているけど、一日も早く戦争が終わって平和な日々が訪れる事を願っています。今、私の毎日は食事が出来て、勉強も出来て、生活にこまる事はありません。そしてそれが当たり前だと思っていました。でも七十四年前の八月六日、それまでふつうの暮らしをしていたところに原爆が落とされ平和な暮らしは消えてなくなってしまいました。もし私があの場にいたらどうなっていただろう、被害にあわず今生きていたらどうしていただろうと、考えました。今のまま平和であり続けるために必要なことは、被爆体験者の方から聞いた話を友達や家族に話しをして戦争の悲惨さを伝え、二度と同じ事がおきないようにする事だと思います。今回の経験は、私にとってとても貴重なものでした。近いうちに広島に行って、今度は私が家族に平和の大切さを伝えたいと思いました。

「平和大使として広島へ行って」

平和を創る人、願う人

流山北小学校　五年　氏名河野　彩水

私は平和大使として広島に行き、伝承者の方のお話を聞いたり、平和記念資料館の中を見学してあることに気がつきました。それは今の当たり前が当時とても幸せなことであって、当時の当たり前が今、めったにないことであるということです。

なぜこのことに気がついたかというと、たくさんのことを見たり聞いたりしたからです。資料館では当時の洋服やケガの様子を見ました。洋服はとてもボロボロでつぎはぎだらけでした。今私たちが着ている服につぎはぎがついているものはほとんどありません。当時の日本と今の日本はちがっています。ケガの様子も同じです。日常で全身ヤケドをした人を見かけることはまずありません。しかし、これが当時の当たり前でした。また、伝承者の方のお話では、当時の広島の様子について話していただけました。原爆が落ちてからしばらくして、被爆者の目に写ったのは一面の焼け野原でした。この一面の焼け野原も今の日本にはありません。あるのは大きな建物と美しい自然です。そして、当時の人々も当時が美しい自然であふれていれば幸せです。

私は、日本は当時と変わったから平和になったのだと思います。逆に、日本が当時と変わらなければ日本には永遠に平和が訪れることはありません。そして、日本を変えたのは、多くの平和を願う人々や平和を創り出す人々が日々日本が平和になるように努力をしたから現在も日本は平和が続いているのです。

原爆の被害を受けた建物はほとんど取りこわしになっていますが、原爆ドームは、市民から反対の声があがり平和の象徴として今も残されています。反対の声をあげた人々も日本が平和になるように願っている人の一人だと思います。

私は、今の平和な日本が続くように、また、もっと平和になるように少しでも力になるために努力していける人になりたいと思います。

「平和大使として広島へ行って」

あの日の広島

東小学校　6年　氏名　古宮　渉

ぼくは、八月五日、六日に流山市平和大使として広島に行きました。ぼくは広島で、心に残ったことが二つあります。

一つ目は平和記念資料館の展示物です。展示物には、原爆がおちたところを再現した映像などがありましたが、一番印象に残ったのは、あの日広島で被爆した人々の服や物、写真などです。ぼろぼろになった服や曲がった金属、八時十五分で止った時計などを見るとあの日の悲惨さがわかりました。また、ひふが垂れ下がった子どもの写真を見ると、ぼくも同じ子どもなのに全くちがう姿を見ると、とてもしょうげき的で、今の時代では、信じられない姿でした。

ぼくが心に残ったことの二つ目は、原爆のおそろしさです。被爆伝承者の話では、一九四五年四月、実験に成功した原爆は全長八メートル、重さ三トンの「リトルボーイ」とよばれ、中でも一番おそろしいのが、一万六千トンの重さのウランが入っていたというのです。そして、その放射線で今でも、苦しんでいる人がいると聞いてとてもおどろきました。

このことからぼくは、戦争を二度とおこしてはいけないとおもいました。ぼくはこれから、悲惨な戦争をや。てはいけないと、より多くの人々に伝えていかなければいけません。それが平和大使となったぼくのこれからの仕事だからです。まずは家族や友達に話をしていきます。そして、ぼくが大人になった頃には、世界から戦争がなくなっていればいいと思います。

「平和大使として広島へ行って」

広島に行って考えたこと

流山小学校　6年　氏名近藤慧人

七十四年前の八月六日、原爆が広島に落ちた、ということは知っていました。ぼくたちと、放射線でたくさんの人が苦しんだこと、多くの人が亡くなったこと。それだけで、原爆について知ったつもりでいました。けれど広島に行ってたくさんの資料や、被爆体験者の六信さんの講話で、もっと原爆について知ることができました。

原爆は、ほんの一瞬で人の命をうばっていった、残虐極まりない兵器であり、あってはならないものです。そんなものが七十四年前広島に落とされ、多くの人が犠牲になりました。近くにいた人は、大火傷を負い、亡くなっていきました。遠くにいた人は、後に様々な病気で苦しめられることになる、放射線を浴びました。そしも、ぼくがその場にいたら、きっと苦しみながら死んでいったでしょう。

資料館では、自分と同じくらいか、少し上か下くらいの年の人の遺品がたくさんあり、今の自分と着ていた服や持っているものがほとんど違っていて、自分とほぼ同じ年なのに兵隊と同じような格好をしていた人もいました。まだ子どものような人も、兵士にさせられた、と考えるとそっとします。中には、赤ちゃんの遺品まであり、赤ちゃんの写真のとなりには、「あつい、あつい」と書かれていて、こんな小さな赤ちゃんの命まで原爆はうばったのか。そう考えると怒りがこみ上げてきました。そんなことがもう二度と起こらないように、これからの世界では、核兵器での犠牲者を無くしていきたいです。

これから、この世界をもっと良くするためには、原爆のような兵器をなくすことや、殺人が起きないこと、戦争をなくす、それぞれの国で仲良くすることが重要なのではないでしょうか。これまで戦争で命を落とした罪なき人たちのためにも、これからの世界をより良くしていくことが大事です。そのために、ぼくたちが声をかけあって戦争をなくしていくべきだと、ぼくは思います。

「平和大使として広島へ行って」

平和なことが幸せだ

西初石 小学校　6年　氏名 島田 陽平

ぼくは原爆や戦争についてあまりくわしくはありません。でも原爆でたくさんの人が亡くなったことは知っていました。

八月五日、広島に到着し、まず初めに被爆体験伝承者の六信静枝さんの話を聞きました。その話の内容は、原爆の直後の川に水面が見えなくなるくらい死体がたくさん浮いていたことや、死体にウジ虫がたくさんついていたことなど、聞いているだけでゾクッとする、悲惨な光景が頭にうかんできていやな気持ちになりました。

次に向かったのは平和記念資料館です。

資料館では、自分の想像をはるかにこえた悲惨な写真がたくさんならんでいました。

目玉が飛び出ている写真や、全身に大やけどを負っている人の写真など、今の時代では考えられないような写真ばかりでした。

また、真っ黒になった弁当箱や、当時着ていたボロボロになった洋服などが展示してありました。それらの展示を見てぼくは、いやな気持ちではなく、当時の人のことがかわいそうに思い、悲しい気持ちになりました。

ぼくは、もう二度と原爆や、戦争が起こりませんようにと強く願いました。

次の日、平和記念公園での平和記念式典に参加しました。そこにはたくさんの人々が来ていて、安倍首相や広島県知事のお話を聞きました。

ぼくは、式典に参加して、十年後、百年後も原爆のことを世界の人々にわすれて欲しくはないと思いました。

今後、世界の国々はおたがいに理解し合って仲良くしていくためにはどうしたらいいのだろうとも考えました。

今回平和大使として平和記念公園に折り鶴を献納して、これからは戦争や原爆の悲しいできごとのない平和な世界が続くようにいのります。そのためには原爆について学んだ平和なことが幸せだということを友達やたくさんの人々に伝えていきたいと思いました。

「平和大使として広島へ行って」

平和大使としての使命

おおたかの森小学校　6年　氏名　白井花菜子

「助けてー、助けてー」。今、この言葉を見て何を思いますか。

昭和20年8月6日8時15分。あの日の空はとてもきれいだったそうだ。原爆が落されるまでは…。

重さ4tのリトルボーイとよばれるほどの大きな原爆が落ちてきた。あたり一面焼け野原。赤く、黒く、そんな街になった。ひふがさけ、血がふき出て、黒くこげ、人間とは思えない姿になってしまった、人間だけじゃない、動物だって、植物だって。あの日のことは日本でくりかえしてはいけない、くりかえられない出来事になってしまった。

このことをもっと知りたいと思った私は平和大使として広島に学びに行くことになった。被爆体験伝承者の方の話を聞いて、とても心がいたくなった。被爆体験者の竹岡さんの話に悲しくなってしまった。あんなことがおこってしまってよいことなのかと思う自分がいた。

広島平和記念資料館の写真に思わず、泣いてしまった人もいた。あのような写真を初めて見た。実際に苦しい目にあったのだろう。

平和大使として学び、思った事がある。私が思ったのは、日本はなんで戦争なんかしてしまったんだ。そういう気持ちがわいてきた。

平和を守るのは、大人だけじゃない。子供だって寄りそい、助け合い、周りの人を平和にできるのだ。そうやってちょっとずつ平和にしていこうと思った。

もちろん広島も被害にあったけれど、長崎にも原爆が落ちて大きな被害にあったことをくりかえしてはならない。

最後に、平和を守るには、「戦争はしてはいけない」のが平和を守る第1歩である。

「平和大使として広島へ行って」

あの日の事実

流山 小学校 5年 氏名 新町 共生

ぼくは、平和大使として広島へ行ってきました。以前にお兄ちゃんが平和大使として広島へ行って戦争や原爆の悲しい出来事や悲惨な出来事などを話してくれて、自分の目で見て知りたいと思ったからです。

広島についてからは被爆体験伝承者の方のお話を聞きました。ウジがついてる死体の話、14万人もの人が亡くなって、生き残った人も白血病や後遺症で苦しい思いをしたという事、先生たちは日本は負けるとき、神風がふき絶対勝つと言われたという話、とても怖くておそろしくて、こんじられないしとても悲しいと思いました。

その後平和記念公園に行き、千羽鶴を献納しました。ボランティアの人達が一生懸命に作ってくれた千羽鶴を年寄りな状態で献納できて安心して、いろんな人の平和への願いが日本や世界に届くようにと願いました。

平和記念資料館では、悲しい展示物、怖い展示物等いろいろありました。ガラスが砕けたままっている女の人の写真、被爆した人の服、骨の山の写真、亡だけになって歩く人、こんなに怖い事が本当にあったんだなとショックでした。

市長さんが結団式の時に、戦争は始めるのは簡単だけど終わらせるのが難しい、だからこそ平和な世の中が尊いと話していました。たくさんの人が死んで、たくさんの人が傷つくような戦争は絶対にダメだし、核兵器も絶対に作っちゃだめだと思います。なのでぼくは平和大使で見て聞いてきた、戦争、原爆の事実を一人でも多くの人に伝えて戦争をゼロにしたいです。

「平和大使として広島へ行って」

平和のためにできること

西初石　小学校　6年　氏名 杉山 珠樹里

「みなさんにとって、『平和』とはどのようなものだと思いますか。」結団式の日、先生が私たちに問いかけた。私は、すぐに答えを出すことはできなかった。なぜなら、戦争がどのようなものなのかを知らない私が、憶測で答えを言っても、沢山の亡くなった方々のことを思うと、身の程知らずな気がしたからだ。戦争を知らない私にとっての「平和」とは、どのようなことか。その答えを出せたのは、実際にヒロシマに行ってからだった。

八月五日、新幹線で四時間ものきょりを移動した後、初めて降り立った広島は、東京のような大都会だった。大勢の人々やたくさんの店に圧倒され、七十四年前に原爆によって焼け野原になったとは、とても信じられなかった。しかし、その後に被爆体験伝承者の六信さんの話を聞き、想いのこもった千羽鶴を献納し、平和記念資料館、原爆ドームを目にした後は、確かに、この地に原爆が落とされたのだと思い知らされた。資料館で見た、血のしみあとが残る服や「三位一体の遺品」と呼ばれる学生服、黒こげになった弁当や当時を写した絵や写真。どれも本やインターネットで見たり読んだりしたものとは違い、より生々しかった。原爆により命をおとした、三十八万人以上もの人々。その中には私と同じ年の子もいた。この中で、死にたくて死んだ人は一人もいない。もっと生きたかったはずだ。どれだけ痛かっただろう、苦しかっただろう。亡くなった人々の思いや苦しみは計りしれない。物言わぬ遺品に、涙がこぼれた。

その時今ある平和は当たり前にあるものではなく、先を生きてきた人々が築きあげたものであり、これからは私自身もその一人となるのだということに気がついた。

平和な今を生きる私は、あの日、あの時に亡くなった人々の分まで、一生けん命に生きようと思った。もう二度とあの日の悲劇を繰りかえさないために、起こさないために、ヒロシマを多くの人に伝えていくために。

「平和大使として広島へ行って」

未来の平和

向小金　小学校　6年　氏名 田内　あかね

「今の世の中は平和」私はず「とそう思っていた。と言うよりも、正直今までの私は戦争について考えたことがなかった。家族や友達と楽しい時間を過ごしたり、大好きな本を読んだり、おいしいものを食べたり。それが当たり前すぎて、平和や戦争について考えることがなかったのだと思う。でも平和大使を終えた今、私が強く感じているのは、この世界は本当に平和と言えるのだろうか、ということだ。

今回初めて資料館を見て、今までの私が吹き飛んでしまうくらい、衝撃を受けた。本当にあったことだと言われても信じられない、信じたくない、そんな恐ろしくありえない姿があった。資料館にはたくさんの展示物があったが、一番強く心に残ったのは、炭になっただお弁当と黒こげになった三輪車。ああ、人の幸せを一瞬で奪う原爆が落とされたんだと実感した。お弁当も三輪車も、今の私にも関わりのあるものだ。だからこそこれが現実に起こったことなのだと理解することができたのかもしれない。

七十四年前の広島も今と同じく、自然豊かな美しい町だったそうだ。それが戦争によって、原爆という意味のない行為によって、一瞬で破壊された。私と同じ小学生も、もっと小さい子供も、老若男女大勢の人が殺された。もっと生きたいと願いながら死んでいった。生き残った人も、放射線のえいきょうで今も苦しんでいる。それを今までの私は知らなかった。だから自分の目に見えているものだけで「今は平和な世の中」だと決めつけていた。

けれど今回いろいろなことを知った私は、今の世の中は平和とは言えないと思った。確かに今の日本は戦争をしていないし、今までの自分は平和な生活をしていると思っていた。でも世界では戦争をしているところもあるし、日本でもまだ原爆によって苦しんでいる人がいる。それが平和と言えるだろうか。本当に平和な世の中にするために、平和大使として

「平和大使として広島へ行って」

未来の平和

向小金　小学校　6年　氏名 田内 あかね

広島の姿を見た私たちが、真の平和な世界を目指して、声をあげ、周りの人たちに戦争の恐ろしさを伝えていきたい。

「平和大使として広島へ行って」

「平和」が続くためには

おおたかの森　小学校　6年　氏名 高橋颯太

　74年前の8月6日、広島に世界で初めて原子爆弾が落とされました。原子爆弾が落とされ、建物も人もこっぱみじんになってしまいました。

　ぼくは今まで、原子爆弾についてよく知っていると思っていました。しかし、ここにきてそれは「考えが甘い」と感じました。

　資料館の展示は、主に原子爆弾を受けた人の写真や衣類、建物の一部がかざられていました。例えば、高温によってとけて折れ曲がった自転車や、放射線による黒い雨を浴びて変色したシャツなどが展示されていました。中でもぼくが一番印象に残っているのは、高熱火災です。なぜ、これが一番印象に残っているかというと、「建物の下じきとなった人々の多くが、はい出ることもできず、生きたまま炎に焼かれました」という説明が書かれていたからです。ぼくはこの説明を見るだけで全身に鳥肌がたってしまいました。

　資料館を歩いていると、自分と同じくらいの年の人の写真がいっぱいありました。その写真を見ていると、こわくなってくると同時にいかりがこみあげてきました。なぜなら何の罪もない子どもや大人たちが死んでしまったからです。ぼくは思いました。原子爆弾は「あくま」だと。自分の大切な物、大切な家族をいっしゅんにして殺してしまうからです。原子爆弾とは決して使ってはいけないものなのです。

　今、ぼく達が日本の平和のためにできることは何だろうか。それは、「平和大使」として学んできたことできるだけ大勢の人に話すことです。死んでしまった大勢の人々の命をむだにしないように。

　今回の平和大使を経験して、大きく変わったことがあります。それは、「平和」への考え方です。何をどうすれば平和が続くのか、と考えるようになりました。一人一人が平和について考えることが、世界の平和が続く大切な一歩になるとぼくは思います。

「平和大使として広島へ行って」

平和大使として

小山小学校　6年　氏名竹内煌祐

もしもぼくがあの時、広島に行って、被爆者とならなくても、こわくて、不安で、絶望感におしつぶされただろう。

資料館で感じたことは、こわさです。そして被爆者の大きな悲しみを感じました。一番こわかったのは人が血を流している絵や人のほねの写真です。子どもが、親兄弟をなくしたり、親が、子どもや家族をなくして悲しむ。探しに行って、ひどいすがたでも生きていることを喜んだり、亡くなっているのを見つけたり、見つけることさえできなかったり。それがとてもかわいそうでぼくも悲しくなりました。被爆体験者の竹田さんは、どれだけ悲しくてさみしかったろうと思いました。被爆体験の話は、想像以上にとてもひどい内容で、ぼくはしばらくの間ぼうぜんとしていました。

ぼくは戦争は二度としてはいけないと思いました。き、とこれが、被爆者が一番に伝えたかったことなのだろうと思います。

式典のときに総理大臣や議長、市長、さらに子ども代表が原爆や平和について話し、ちかいをしていました。その時ぼくも心の中でちかいました。二度と戦争はおこさない。今戦争をしていたり、武器を作っている国にも平和のすばらしさを伝えて、争いをやめさせる。そして戦争のない世界にしていきます。

今戦争をしている国も、昔の戦争もぼくたちには関係ないわけがないということも思いました。今ぼくたちが平和な日本でくらせているのは、戦争でつらい経験をした人たちが、二度とこの悲げきくり返してはいけないとちかい、努力を続けてきてくれたからだと思います。ぼくはこの努力をむだにしたくはありません。

まずは身近な人たちに戦争の悲げきを伝え、こわさを知ってもらいたいです。そしてそれをたくさんの人々に広め、戦争や争いをなくして、武器なんてだれも持たない平和な世界を作っていきたいです。

「平和大使として広島へ行って」

世界平和への第1歩

小山小学校　5年　氏名竹田 凌我

七十四年前の八月六日、現実とは思えないほど悲惨なことが起きていた。それは、広島に原爆が落とされたことだ。僕が想像していた「原爆」をはるかに超えるものだと、資料館で見て感じた。広島平和記念資料館には、とても残酷で、悲惨な写真や絵が数多くあった。つい、目をそらしたくなってしまう物もあった。しかし、「これが現実、これが本当の真実だ」と考えた。

被爆体験伝承者の話では、資料館以上に悲惨な街のすがたや悲惨なすがたの人々を想像してしまうほど残酷な話だった。聞いているだけでも怖くなってしまうほどだ。ちなみに伝承者は被爆体験をしていない。被爆体験者が減っている。だからこそ、この話を後世へしっかり伝えていくことが大切だ。

八月六日、広島平和記念式典に参列した。式典の空気はとても重々しく、事の重大さに改めて気づいた。広島平和記念式典には、九十二か国が参列した。世界中の関心が高まっているのだろう。この関心の高さをいつまでも続けていきたい。そして、核兵器保有国をなくすきっかけになってほしい。また、今なお争っている国々にも広島の気持ちを届けたい。

世界唯一の被爆国である日本。だからこそ核兵器の危険性、「核兵器を使う」という事の重大さを世界に発信していくことがとても大切だと考えた。

ノーベル平和賞を受賞した、マザーテレサは、「世界平和のためにみんなができることとして「家に帰って家族を愛してあげてください」と言った。僕はこの言葉を聞いて、感銘を受けた。この言葉は、身近な人を仲良く大切にし、平和の輪が広がっていく事が真の世界平和につながるという意味があると考えた。これが、だれでもできる世界平和への第一歩だ。みんなにこの想いを伝えたい。

「平和大使として広島へ行って」

原ばくのこわさを知って

流山小学校 5年 氏名 田中 美羽

広島で一番印象に残ったのが原ばくドームです。理由は、すごくしょうぶな建物だったのに、骨組は残ったものの、いっしゅんのうちに焼けこげてしまっていて、原ばくのこわさ、恐ろしさがとても伝わってきたからです。

また、資料館で見た、男女の区別さえできない人々が衣服は焼けただれて、はだか同然かみのももなく、目もとびでて、くちびるも目も引きちぎられたような人、顔面のひふもたれ下がり、全身、血まみれの人々の写真や絵を見て、原ばくのこわさ、ひさんさを改めて知りました。

平和大使として、広島へ行く前の私は、「戦争」、それは遠い昔、遠い所で起こったこと、そう思っていた。だけど、それはちがっていました。だって、ばく発した所から何キロもはなれた所にも、とばっちり、原子ばくだんのえいきょうで、無きずだった人も、今だちのようにふった、黒い雨のえいきょうで(後で教しゅ線と分かったし無きずだったんも、後ハしょうで、何らかの病気で、なくなったり、苦しんだり、どこかが不自由になったり、生きている人もいるけれど、まだ苦しんでいるので、とてもかわいそうだとおもいました。

今は平和だけど、74年前には原ばくがおちるとびっくりさんなできごとがあったから、戦争はいけないとおもったため、今、平和になんたと思います。二度とおきないようにするにはどうしたらいいのだろうかっも、と時が過ぎたら、ひばくしゃの言われていたが消えて戦争のこわさはわすれられてしまい、またおきてしまうかもしれまん。そのために、「平和大使」として、平和はどんなことか、戦争原ばくはどんなにこわいものか、ぜっ対にやってはいけないと伝ん、それについてより深く考え、伝えることだと思います。私が思う平和は、学校に元気に行き、友達とたのしくおしゃべりし、かぞくとふつうにくらして笑うことだと思います。今に感謝したいです。

「平和大使として広島へ行って」

広島で知った「悲劇」と「苦しみ」

流山市立
おおたかの森小学校　5年　氏名 谷岡 幸

わたしは、広島ってどんな所なの？どれくらいのひ害？そんなにひどくはないんじゃないの？と思っていた。しかし、それはちがった。今、生きている人達は幸せ。だが、資料館や原爆ドームなどに行って、昔の人はとても悲劇と苦しみになやませていたことがわかった。

被爆体験伝承者の方の話で、原爆は恐ろしいものだということと、人口三十万人の内、十四万人も死なせたことが心にしょうげきをあたえた。とくに心に残ったところは、お母さんとはぐれてしまって、すっとさがしていて、やっと見つけたけどずごいきずで手じゃつをするというところだ。わたしはこの話を聞いて、ぜったいにせんそうはしてはいけない。また同じことはさせない。させたくない。そう心に決めた。幸いこの方は今もくらしているそうですが、原爆が落ちたところの約九十二％がひ害を受けている。とくに、ほうしゃせん病害が大きくひ害をあたえている。ほうしゃせんとは、とくべつに強いはたらきを持った光線のようなもの。原爆をうつと放射線も放たれるため、放射線も出てくる。

このようなひ害をもうださないためには、二つのことが大事だと思う。一つ目は自分でよく考えてみること。自分で考えず、人任せにするから、争いが起きる。また、自分で思っていなくても、きずつけてしまうかもしれない。だからこそ考えるは大事だと思う。二つ目は人の話をよく聞くということ。自分の意見がぜったいあっている。そう考えて、自分の意見にさんせいさせようとしている。そんなことをしたら、いつまでたっても平和は続かない。だから、よく聞くは大事だ。

よく考え、話し合い、人の話をよく聞く。考えない。話し合わない。それだとずっと争いが起こると思う。しっかりとすれば、誰かがわかってくれる。こうして、平和にしていきたい。

「平和大使として広島へ行って」

戦争のこわさ

小山　小学校　5年　氏名塚本武士

昭和二十年（一九四五年）八月六日の午前八時十五分に、広島に原ばくが落ちた。直径三メートル、重さ四トンのものが、東京スカイツリーの天辺とほぼ同じ高さから落下した。広島市内のほとんどを焼きつくし、市の人口約三十五万人のうち十四万人以上がぎせいになった。多くの人達が大けがを負い、家族を失った。

被ばく体験伝承者の六信さんの話を聞き、家族の存在の大きさを知った。自分もけがを負いながら、家族のことが心配でさがし続けた竹岡さんは、六日目にやっと母親を見つけた。全身包帯でまかれた母親をかん病し続けたそうだ。ぼくも竹岡さんの立場だったら、自分がけがを負っていても、育ててくれた家族をさがすだろう。見つかるまで、一年でも二年でもさがすと思う。

原ばく資料館を見学して、被ばくした人の気持ちを思うと悲しくて仕方が無い。平和大使として広島へ行く前よりも、戦争は絶対にやってはいけないという気持ちがものすごく強くなった。ぼろぼろになった服、焼かれた三輪車、血だらけで全身やけどを負った人、すわった人が焼きつくされ、かげしか残っていないものを見て、ぼくはくやしくなり、何で戦争はあるんだろうといかりもわいてくる。ぼくは、右手の甲にやけどをしたことがある。小さなやけどだったがズキズキしていたかった。あのいたみが全身をおおっているかと思うと……たえがたいいたみだと思う。

戦争について、たくさんの人が考えるべきだと思った。戦争のこわさを知れば、世界は変わっていくと思う。今この時でも、世の中にはうえなどで苦しむ人も多い。当り前と思っていたぼくの今の生活は、とてもありがたいものだと気付いた。一日一日に感謝して、世界の平和についてできることを考えて努力していきたい。

「平和大使として広島へ行って」

平和について学んでいく

おおたかの森小学校　5年　氏名 幌莉子

静かな張り詰めた会場の中、平和の鐘が「ゴーン」と厳かに鳴り響き、私は緊張のあまり身震いしました。決して軽い気持ちで参加したわけではありませんでしたが、広島市長が話した被爆者の歌や、子ども代表の平和への誓いを聞き、身の引きしまる思いでした。

原爆は七十四年も前の出来事なのに、いまだに人々が被爆の後遺症に苦しんでいることや、毎年亡くなられている方が沢山いることにとても驚きました。私にとって、今まで戦争は遠い存在でした。普通に学校へ行き、友達と遊び、家族と旅行を楽しんだりできる、そういう当たり前の生活が平和だからできることに気づきました。今でも終わることのない被爆者の苦しみを知り、自分の小さな出来事に悩んだり怒ったりしていることが恥ずかしくなりました。

平和大使に選ばれてから、原爆について勉強しました。十二才で亡くなった禎子さんの気持ちを思うと、このような罪のない人々の命を一瞬にして奪った原爆がにくいです。もう二度と使用されることがあってはならないと強く思います。そのためには平和であり続ける事を私たち一人一人がよく考え、行動することが大事だと感じています。

平和記念資料館では、八時十五分で止まった時計や焼け焦げたお弁当箱が印象に残っています。普段の生活が原爆により一瞬で壊されてしまったことが分かり、怖く恐ろしくなりました。七十四年後の私が今見ても恐ろしいので、当時この経験をした人達はどんなに怖く恐ろしかったことと思います。

私は広島へ行き、戦争の悲惨さ、恐ろしさ、平和の大切さを知りました。今でも世界のどこかで争いがあります。世界中の人々が平和への思いを大切にすることを願います。この気持ちをいつまでも持ち続け、しっかり勉強し、世界平和に貢献していける人間になりたいです。また、平和大使として平和の大切さを社会へ伝えていくことを誓います。

「平和大使として広島へ行って」

広島へ行って

おおたかの森小学校　5年　氏名平澤 芽生

わたしは、平和大使として、広島に行きました。広島ではいなぜこんなおそろしいできごとがおきたのか、原ばくというのはどれだけたくさんの人々や建物に被害をもたらしたかを学びに行きました。七十四年前の八月六日に原子ばくだんが落とされ、何人もの人々が、なくなってしまいました。赤ちゃんやよう子園児など、まだ小さい子どもたちまでなくなってしまいました。わたしはそれを知って、かわいそうだなと思いました。広島に行く前は原ばくのことについては少ししか知らなかったけれど、広島に行って原ばくを体験した人のお話を聞いたら、原ばくのおそろしさがもっとわかりました。その中でも大変だと思ったことは、放しゃ線の被害で人々がやけどでまっくろになったり、かみの毛がぬけたり、体調不良となってしまったことです。原ばくが落ちた後は何人もの人々がなくなっていました。資料館の中では当時のことについてくわしく書かれていました。資料館の中で、最もおそろしいと思ったことは熱せんによる被害で体中がやけどしていた人を見たことです。それを見てびっくりしました。わたしは広島に行く前までは平和があたりまえだと思っていたけれど広島に行ったら昔の広島に、原子ばくだんが落ちてきたことを知り、あたりまえではないと気づきました。今は平和なので、わたしたちがしていかなればならないのはまわりの人達におそろしいできごとが広島で昔あったことを、伝えてくることだと思います。わたしは、これからも平和を大切にしていこうと思いました。

「平和大使として広島へ行って」

「多くの命をうばった原爆」

西初石　小学校　五年　氏名 村北 美樹

「多くの命をうばった原爆」

村北　美樹

昭和二十年、八月六日午前八時十五分広島に原爆（リトル・ボーイ）が実験のために、落とされました。

私達平和大使は六信さん（むつのぶ）にお話を聞きました。その話は本当にあった話で、広島はまるこげになりひがいにあった人は爆風でいっしゅんで飛ばされたとうがいました。平和だった広島がいっしゅんではかいされ竹岡さんは三十ナートルも飛ばされて、お母さんをさがしに行くというお話でした。

次に、原爆記念しりょう館に行き写真、原爆体験者のひろめる人のお話を聞き多くの命をうばった原爆について考えました。

私達がこうや、てふつうに食べてテレビを見ているのは、ふつうじゃありません、昔に原爆のひがいにあった人はまったくたべれないような状きょうだったことを知りました。

次に原爆ドームに行き、今度は平和について考えてみました。

私が写真で見た原爆ドームと本当、実際に見た原爆ドームではまったくちがいました。

私はあんなまるこげの原爆ドームを見てあんなひどい戦争をもうしないでほしい、世界が平和な国になるといいと思ったし、原爆のことを忘れないでほしいこれからもうけつぐ事が大切だと思いました。

そして多くの命をうばわれた広島のぎせい者がいたことも決して忘れてはいけないことだと思いました。

またにあれだけ多くの命をうばった原爆、（リトル・ボーイ）が落とされたことによって多くの命がうばわれ人が努力してつくってきたものがいっしゅんではかいされこれは、忘れてはいけないと思いました。

六信さんみたいに体験を受けつぐ事が大切だと思いました。これからも平和大使で学んだことを生かしていきたいです。

「平和大使として広島へ行って」

平和とは何か

おおたかの森小学校　6年　氏名 村辻 奏

平和とは何だろうか。辞書で調べると、「戦争や紛争がなく、世の中がおだやかな状態にあること。心配やもめごとがなく、おだやかなこと。また、そのさま。」とある。

ぼくは、今平和な暮らしの中生活している訳です。友達と学校へ行ったり、何の心配もなくすごしています。原爆がおちる前は広島にも人でいる人々も、普通に平和にすごしていました。ですが、原爆が落されメチャクチャにされました。平和記念資料館でなんなことがわかることがたくさん展示されていました。なかで印象に残ったのは、焼けのこった三輪車です。自宅前で乗って遊んでいる時に被爆してろくでもなった男の子伸ちゃんの三輪車でした。ぼくも同じ年のころよくのって遊んでました。そのような当り前なことのようにごはんをたべたり、笑ったりすることが普通だけどとても幸せなんだなと感じました。千九百四十五年八月六日の午前八時十五分広島に原爆がおち一瞬にして約十四万人が亡なった。平和な生活をうばい、生き残った人達も後遺害があったり、病気になったりして亡くなったり赤ちゃんを産んでもすぐ亡くなってしまうことを知って悲しくなりました。このように原爆はたくさん人の命をうばうので世の中からなくなって欲しいと思っています。

今回「平和大使」として、令和元年八月六日の平和式典に参加して平和について考える貴重な体験をする事が出来たので、沢山の人に知った事を教えたいです。

「平和大使として広島へ行って」

原爆の恐ろしさを知った

東小学校　五年　氏名渡邊　岳

「流山市で平和大使っていうのがあるらしいけど、参加してみる？」

と、母から聞かれた。最初は、原爆とか戦争に関係があるから、怖そうで気が進まなかった。でも、こういう経験は大事だと思い、勇気を出して参加することにした。

正直ぼくは、くわしいことはほとんど知らなかった。そこで、図書館に行って「はだしのゲン」を借りることにした。広島に原爆が落とされ、主人公のゲンが家族を失いながらも、たくましく生きていく話である。その話の中に、赤ちゃんの妹が原爆症で死んでしまう場面があり、とても悲しかった。こんなに短い命で終わってしまうことが、かわいそうでならなかった。

原爆資料館では、全身にやけどを負った二才の男の子の下着を見た。こんなに小さい子の命までつばうのかと、怒りがこみ上げてきた。聞いた話では、母親が子に覆いかぶさり、熱風から守りながら死んでいる遺体が街中にあったそうだ。自分の身をていして子を守りたいという気持ちに深い愛情を感じた。こんなことは、絶対にくり返してはいけない。

原爆投下から七十四年の月日が流れた。数字で聞くと、昔のことのように思える。ぼくの祖父母は、八十九才と八十六才。その時代を生きている。当時、十五才と十二才で今の自分と年が近い。そう考えると、意外と近い出来事のように感じる。広島に行く前は、命について深く考えることがなかった。友達とけんかして、「死ね！」と言われて言い返したことがあった。命の大切さがわかった今は、そんな言葉はつかわないと心に決めた。

広島に行く前は、原爆のはっきりした正体がわからないまま、怖いと思っていた。でも広島へ行ったことで原爆の威力がわかり、同じ人間なのにどうしてこんなにひどいことができるのかと疑問と共に許せない気持ちがわいてきた。次は、長崎の原爆について調べて、命の大切さを考えていきたい。